

一見楽そうではあるが、実情は果たしてどうだろうか？

音痴とカラオケ

赤ん坊が生まれた直後にあげる産声は、ほぼ例外なくピッチ四百四十のラの音（ピアノの中央より少し右よりのラ）だと言うし、生まれつき音痴の子供はまづいない、というのが一般的通説である。音痴とは、厳密な意味においては「歌が下手である」というよりは、「音感が鈍い」とするのが正しい。オンチ、と一言で片づけてしまつては身も蓋もないが、その要素は何種類かに分類できる。

音感の発達の優劣は、人間がまだ赤ん坊の頃に母親から繰り返し歌って聞かされる子守歌に左右される事が多い。音痴の親の歌をたえず聞いていると、その子も音痴になりやすい。音感が一番発達するのは四才から六才の頃で、この期間に子供に専門的な訓練を施すと、「絶対音感」というものをも身につけさせることができる。

この「絶対音感」があると、たとえば下駄がカラコンロンという音や茶碗を箸で叩いて出した音の高さを即座に言い当てたり、ひじや手の平でめちやくちやに弾かれたピアノの和音——普通の人にとってはただの雑音であるが——の構成音を聞き分けたりできるようになる。ボンと弾かれたラの音を聞いて、この音が一秒間に四百四十回か四百四十一回か四百四十二回か、あるいはその中間の振動数の音かもすぐわかってしまう。そしてド、と思えばド、ミと思えばその高さの音を、何の楽器の助けもなく自分の声で正確に出せるようになれば本物である。

余談ではあるが、第二次世界大戦中はこの絶対音感を持った音楽家達がかり出され、遠くから響いてくる

飛行機の爆音によって敵機の数、種類、高度などを判断する試みが行なわれていたさうである。

何か超人的訓練を経てこそ身につく能力のように思えるが、決してそのようなものではない。複雑な日本語を常時耳で聞き、声を使って真似ているうちに何の苦もなく喋れるようになるのと、理屈は全く同じである。この理論を体系化し、ヴァイオリン奏法を子供に教える際に利用したのが鈴木慎一氏の提唱する、世界的にも有名な「鈴木メソッド」である。

不幸にもこういった音楽の世界に触れることなく、その上音程の不確かな、まるで御詠歌のような子守歌のみ聞いて育つと、いわゆる「音感音痴」になる事がある。ピアノでふたつの別の音を聞いてもその音の高低を判断できなかったり、オルガンの音を聞いても単にブーブーとしか聞こえなかったり、これはかなり重症の音痴である。

しかし世間一般の音痴を自認する人々の症状がこのようであることは少なく、単なる「声帯音痴」がそのほとんどである。これはノーコンの野球のピッチャーにも似て、身体や感覚など基本的な条件はすべて揃っているのに、悲しきかな、自分の意志によって声帯のコントロールがうまくできないのである。

一方「リズム音痴」という音痴もある。リズム感が今ひとつ不明確で音楽の流れに乗れない、というものだが、これは比較的「慣れ」によって矯正されていくことが多い。

リズムを各種の言葉と対応させて覚えることもできる。たとえば、ひとつの音符の四つ刻み、三つ刻み（三連音符）と五つ刻み（五連音符）のニュアンスをつかむ練習を試みよう。これには例としていろいろな地名を利用し、一定の拍子に合わせながら「おおさかなーごーやーあきはばら」（大阪・名古屋・秋葉原）などと唱えるとわかりやすい。「お」と「な」と「あ」が拍子の頭になる。同様な方法はヨーロッパにもある。簡単な「タンタカタン」というリズムを理解する際にも *Nice cup of tea* のようなセンテンスに置き代えると、小さい子供をはじめそれまでリズム練習に縁のなかった大人でも、音符を紙に

書いて説明されるよりは感覚的にとらえやすいだろう。

日本はおろか最近はいんにもあるカラオケは、歌に自信のない人にとって頭痛の種である。しかしたとえ自分が音痴である、と思っても、それが前述の重症の音感音痴でない限り、歌は練習次第で必ず上達する。

その際、まずこれは、という曲をひとつ選び、それを完璧にマスターするのが歌唱上達への最短距離だ。曲は好きな曲、知っている歌、という観点で決めるのではなく、音程とリズムの面からわかりやすいものを選ぶのが良い。誰もが好んで歌う有名な曲よりも、多少地味な、知られていない曲を一曲持っている方が賢い。まず最初は正確をモットーとして清潔に、妙なこぶしなどつけずに歌う。歌手によって特有の歌い回しは、その人の持ち味を出すための独特な崩し方であって、それを真似たオリジナルの「そっくりさん」になれるかどうかと、歌そのものの上手下手は関係がない。

カラオケで歌う時にはマイクという強力な武器があるので、それを最大限利用するべきである。小さな声で無理をせず、声に強弱が必要な場所では本職の歌手のように息の量で調節するのではなく、マイクを口に近い近づけたり離したりする方法を取ろう。

カラオケの伴奏はリズムがはっきりとわかりやすく作られているので、何回も合わせて経験を積むうちに、歌いながらも伴奏が聞こえてくるようになる。こうなったらしめたもの、自信がついてくる。このようにして一曲ずつレパートリーを増やすのが良いが、他の人の歌っているのを注意深く聞くのも、声帯にとっての良い訓練となる。というのは、人の歌を聞いていると、自分では声こそ出さなくても声帯は反応しており、聞こえてくる音の高低に合わせてたえず緊張しているからである。

「習うより慣れろ」とはよく言ったもので、たとえば石原裕次郎（だいぶ古いが）などのデビュー当時の曲と晩年のヒット曲とを比べてみると、声の使い方、音程の正確さ、音域の幅、音色のパラエティー等々、あたかも別人が歌っているようである。

日本では好き嫌いにかかわりなく小学校で半分無理やり歌わされる文部省唱歌のおかげで、箸にも棒にもかからないような重症音痴はあまりいないようである。呆れる程の音痴はかえって欧米に多い。

ところで、かく言う私も家の者にあきられる程のひどいオンチである。ウイーンにおられる音痴諸氏、ご安心あれ。

ピアノの歴史

十五世紀、ハプスブルグ家に神聖ローマ帝国の帝位が授けられた。それ以来十九世紀までの長い間、ウイーンはヨーロッパの中心として栄え続ける。政治や経済面での発展のみならず、芸術や文化、中でも特に音楽の中心としての重要な位置については、今ここで改めて述べる必要もないだろう。

「音楽の都」ウイーンを本拠地として活躍した音楽家達の名は、ハイドゥン、モーツァルトなどをはじめ挙げ出せばきりがながないが、その中でピアノという楽器はどのように発達してきたのだろうか。一口に楽器といっても、弦楽器、管楽器、打楽器その他いろいろあるが、すでに何世紀もの間使用されてきたこれらの楽器は、それぞれの時代の音楽家の要求を反映し、変化してきた。鍵盤楽器の代表ともいえるピアノも、その例外ではない。